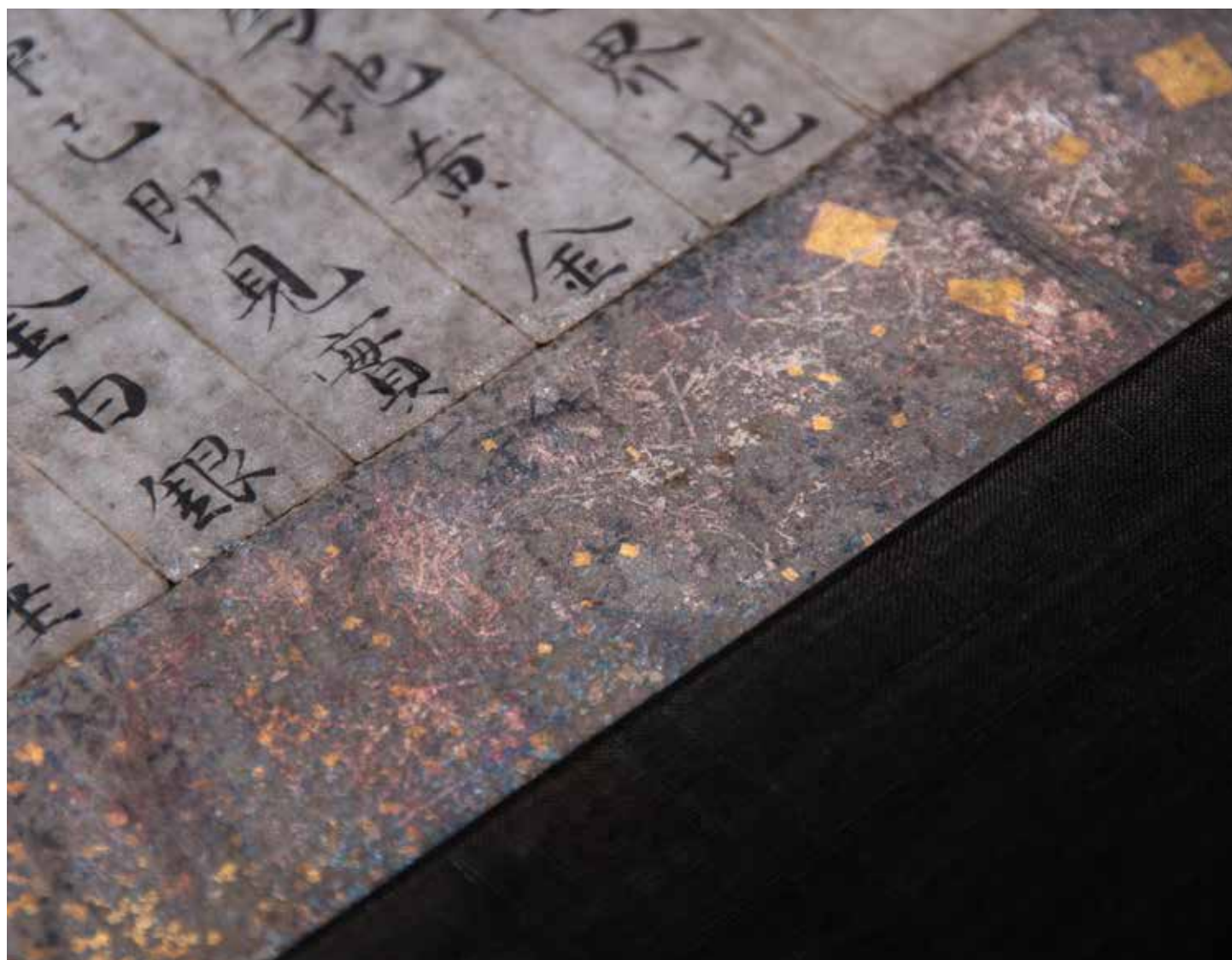


上原 美術館 通信

No.
18

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2022年7月15日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



本展は上原コレクションの写経作品を中心に、料紙や仏像に施された美しい金銀の装飾や、墨色の濃淡が味わい深い作品をお楽しみいただける展覧会です。今回は展示作品のみどころをご紹介します。

展示室では、入ってすぐの中央部分に新収蔵の《金銀野毛散観普賢菩薩行法経断簡》(平安時代後期)を展示しています。本経は薄い紙に金銀箔を大小に切ったものや、細く糸のように切った箔を上下に散らし、『法華経』の結経である「観普賢菩薩行法経」を書写したもので、光の加減で、紙表面に散らした金銀箔がきらりと光り、ほの暗い空間に幻想的に浮かび上がります。本展は間近でこの美しい装飾経をお楽しみいただけます。奥には《大日如来像》(鎌倉時代/文永7(1270)年)と、《高野大師行状絵巻断簡》(鎌倉～南北朝時代、※新収蔵・初公開)を展示しています。

《大日如来像》は静快という僧が発願し、仏師の行順が造った仏像です。大日如来は両界曼荼羅の中央に位置する仏で、真言宗の祖、弘法大師・空海が唐で結縁灌頂(仏と縁を結ぶ儀式)を行った際に大日如来と結縁したと伝えられています。当館の大日如来像は法界定印を結ぶ胎藏界大日如来。表面は黒々とした漆が塗られていますが、膝部分をよく見ると金箔を細く切って貼り合わせて模様を作る截金が残っています。

《高野大師行状絵巻断簡》は前回の美術館通信(No.17)でもご紹介しましたが、空海が唐へ渡り密教を学び、遣唐使船で九州・大宰府へと戻ってきた場面です。空海が唐からもたらしたたくさんの経典や文物が、荷下ろしされている様子が描かれています。繊細な波の線、海の薄い青い色や帆柱の赤い色、船に乗る人物の服の緑など、今でも描かれた当初の色が残っているところは本作品の見どころの一つです。



展示室のようす

展示室両側では、上原コレクションから巻物の経典をご紹介します。今回展示している作品の中でも、『法華経巻五(平基親願経)』(平安時代/治承4(1180)年)の冒頭に描かれる見返し絵は、肌の白い頬のふっくらとした童子が二人、それぞれ胡蝶の羽根と極楽で美しい声で歌う迦陵頻伽という鳥の姿に扮して、手には香炉を持ち、優雅に舞う姿がとても可愛らしく描かれています。童子の服装は840年程前に描かれたとは思えないほど鮮やかな色が残り、紺色の紙から浮かび上がるかのようなようです。本経は後白河上皇に仕えた平基親が発願し作った開結合せて十巻になる法華経の一巻です。



《妙法蓮華経巻五(平基親願経)》見返し部分

紺紙に金字で法華経を書写した《法華経巻七》(鎌倉時代)は「常不軽菩薩品」など5つの章が納められており、見返し絵には金泥で如来や菩薩を、画面下部に「常不軽菩薩品」の場面が金泥で描かれています。常不軽菩薩は会う人すべてを仏として合掌礼拝し、迫害されても礼拝をやめなかったという菩薩で、過去世の釈迦であったといわれます。描かれる如来は金色の肉身であらわされ、髪の毛は濃い群青色が塗られています。やや丸顔であらわされた如来や菩薩は子供のような可愛らしさです。

江戸時代に民衆を教化するため、多くの書画を親しみやすい筆致で描いた白隠慧鶴の《達磨図》は、墨色の味わいを楽しめる作品です。大きな目をやや上方に向けた達磨はたっぶりとした筆遣いで思い切った線を描き、線のところどころにあらわれる濃淡やかすれが墨一色とは思えない色味を引き出しています。達磨の上には禅の言葉「見性成佛」の文字が書かれ、達磨図を見る者を禅の境地に誘うかのようです。

本展では装飾経のほかに静岡県ゆかりの中世の写経や、鎌倉時代の阿弥陀如来像をご紹介します。(櫻井)

※本展のみ写真撮影可能です。



展示室のようす

近代館にて開催中の展覧会「船と絵画」では、収蔵品から画家と船の関係を紹介しております。展示中の作品の中には船が描かれていない作品もあります。ゴーギャンの初期作品《森の中、サン=クルー》です。本作はゴーギャンが25歳のときに描いた最初期の油彩画。ゴーギャンのカタログ・レゾネの並びでは最初の風景画です。この作品が船とどのような関係があるのでしょうか。

ゴーギャンの父は共和主義のジャーナリストで、母は社会運動家フローラ・トリスタンの娘。ゴーギャンが生まれて間もなくナポレオン3世が大統領になると、一家は弾圧を恐れてペルーに船で渡り、父はその渡航中に亡くなりました。7歳でフランスに戻り、海軍学校を目指しますが途中で断念、17歳で商船の船乗り見習いとなってブラジルやペルーを旅します。その後、19歳のときに海軍に入りジェローム・ナポレオン号に乗船、欧州各地を巡ります。1870年に普仏戦争が勃発すると、ゴーギャンは同船で任務にあたりました。終戦後、除隊してパリに戻り、母の友人で資産家のギュスターヴ・アローザの紹介により株式仲買商として働き始めます。25歳のゴーギャンがアローザの邸宅周辺で日曜画家として描いたのがこの小さな風景画です。木陰にはスカートを履いた女性たちがピク



ポール・ゴーギャン《森の中、サン=クルー》1873年

ニックをしています。素早いタッチには移りゆく自然を前にした画家の感覚がよみがえり、船から降りたばかりのゴーギャンの伸びやかな感性が伝わります。アローザの邸宅ではしばしばピクニックが催されましたが、その客人の一人が若きデンマーク人メット=ソフィー・ガッドです。ゴーギャンはこの絵を描いた年にメットと結婚し、ひとときの幸せな時間を過ごします。しかし、それも長くは続きませんでした。株の大暴落で職を失ったゴーギャンは妻の実家があるコペンハーゲンで生活しますが、間もなく画家として立つためパリやブルターニュで制作を始めます。そして、ついには船でタヒチへと旅立ち、妻のもとへ帰ることはありませんでした。そうして離ればなれになった二人ですが、この小さな風景画はメットが生涯手元に置いていた作品です。ゴーギャンの生涯は世界を巡る航海のようにダイナミックなものであり、この小さな絵はパリに寄港したひとときの美しい思い出といえます。

船は画家の豊かな人生を垣間見せます。《夕月富士》は牛島憲之87歳の作品。夕暮れの空が富士山をシルエットに美しい色彩を見せ、ふもとは山中湖が広がります。画面右下を見ると、小さな船が白波を立てながら走っています。牛島自身は多くの画家が絵にした富士山は描かないと決めていましたが、その美しい姿が少しずつ自らの心に蓄積していきます。そして富士山を描きたくなったのが85歳のときでした。牛島は東京美術学校の同級生である荻須高徳や小磯良平とちがって、海外で学ぶ機会はありませんでした。しかし、一歩ずつあゆみ続けるその画業は、97年の人生を最後まで輝かせます。大自然の中を進むこの小さな船は、画家の人生そのものに重なるかのようです。

船と絵画のつながりを見ると、その作品の魅力がより浮かび上がります。船に思いを託し、みなもに揺られながら、ゆっくりとしたひとときをお楽しみください。(土森)



牛島憲之《夕月富士》1987(昭和62)年



《金銀野毛散観普賢菩薩行法經断簡》



《金剛三昧經卷上(神護寺經)見返し絵

雲母の粉を刷き金銀の箔を大小さまざまに散らした紙を用い、きらびやかな仏の世界をあらわした経典。濃紺に染めた紙に金泥や銀泥で仏が説法をするさまを描いた見返し絵。平安時代後期、装飾を凝らし善美をつくした経典が数多く生み出されました。そこには仏の教えにすがり、供養することで来世の安穩を願った平安貴族たちの思いが垣間見られます。

現在、開催中の展覧会「きん ぎん すみいろ」では、新収蔵した《金銀野毛散観普賢菩薩行法經断簡》(平安時代後期/12世紀)を公開しています。平安時代後期、滅罪や女人成仏を説く『法華經』は、現世の不安をのがれ、仏の世界に憧れた貴族たちの深い信仰を集めた経典で、『法華經』を書写した美しい装飾経が多く生み出されました。本作品も『法華經』の結経となる「観普賢菩薩行法經」の一部分が書写されています。

きらきらと輝く雲母の粉を刷いた上に大小の金銀箔を散らした紙は非常に薄く繊細で、小さいものは1mm程、大きいものは2cm程の金銀箔が使われています(表紙写真)。この金銀箔は形によって切箔、裂箔、野毛と呼ばれます。切箔は竹製の小さな刀で箔を四角く切ったもの。大きさはさまざまですが、

1mm程度から1cm近いものまであります。裂箔は竹の刀で不定形に箔をちぎったもので、切箔よりもやや大きいものになります。野毛は箔を重ねて針のような細さに切ったものをいいます。

本作品では、表面の界線(経文を書くための線)の内部は雲母引きのみとし、上下には金銀の切箔や野毛を華やかに散らしています。紙の背面全体には、雲や洲浜のような景色が浮かび上がるように金銀箔を配し、表から見ると経文部分に背面の模様透けて浮かび上がってきます。作られた当初の姿を想像すると、光が当たるたびにきらきらと輝く、まばゆいばかりの経典だったでしょう。今は銀が酸化してにぶく光り、落ち着いた紙面になっていますが、当時の技術力もさることながら、美しい紙で仏の言葉を記した経典を供養したいという思いが伝わってくる作品です。このような料紙を使用している経典は静岡県・鉄舟寺に伝わった《久能寺經》(国宝・平安時代)などがありますが、こうした料紙を使った遺例は少なく、多くの財力をもった一部の貴族しか作れなかったのでしょう。

また平安時代後期には藍で染めた紺紙に金字で経文を書写する一切経も多く制作されました。一切経とは仏の教えをあらわした経、誠めを説く律、仏

教哲学を記した論書の3つの重要な要素を記したもので、5400巻という膨大な数になります。紺紙に金字で経文を書写することで仏の住まう瑠璃の大地や金銀が輝く世界をあらわすと考えられます。代表的な紺紙金字一切経は、京都・高雄の神護寺に伝来した《神護寺經》、奥州藤原氏の初代・清衡が発願した《金銀交書一切經(中尊寺經)》などで、現在当館で《神護寺經》、《中尊寺經》がお楽しみいただけます。これらの経典はいずれも金銀泥で絡み合う草花が描かれた美しい宝相華唐草文の表紙があり、そこに記される経題は金泥で書写されました。内側の冒頭は見返し絵という部分で、経典の内容を描いた絵のほか、釈迦が弟子や菩薩たちに囲まれて説法をしている場面が描かれています。展示中の《神護寺經》見返し絵には釈迦の説法図が描かれ、目鼻を筆先で点を打ったように見える釈迦や菩薩の顔は素朴な愛らしさを感じさせます。

装飾経は経文に込められた祈りと文字の美しさもさることながら、料紙の色や装飾もみどころの一つです。文字と料紙それぞれの美しさをお楽しみいただければ幸いです。

生涯を通じて30隻以上の船を所有した新印象主義の画家シニャックにとって、船と絵画は分かち難いものでした。シニャックは1863年、ナポレオン3世を顧客に持つ裕福な馬具商の家に生まれます。16歳のときに父が結核で急逝すると、間もなく母とともにパリからセーヌ川対岸のアニエールに移り住みました。この頃からシニャックは本格的に絵を描き始めます。特に憧れていたのはモネをはじめとする印象主義の画家でした。この頃のエピソードとして、シニャックが印象派展で模写していると受付番のゴーギャンに嗜められたという話があります。アニエールはモネが暮らしたアルジャントゥイユに近く、印象主義に憧れたシニャックにとっては格好の制作の場となりました。この頃、シニャックは一人乗りのカヌーを手に入れて、セーヌ川へと漕ぎ出します。その舟には「マネーブラー・ワグナー」という憧れの芸術家の名前を付けました。この頃、モネはアトリエ船から絵を描いており、シニャックは船にそうした画家への憧れを重ねたのかもしれませんが、《アニエール、洗濯船》(図1)はシニャックの手記に第一号として記された18歳の作品です。この青い舟はひょっとしたらシニャックのものではないかと、見るものの想像力をかき立てます。

1884年、シニャックは20歳のときにジョルジュ・スーラと出会い、二人は点描を用いた新印象主義の画家として脚光を浴びようになります。印象主義の色彩を理論的に再構築するその絵画は、ピサロ

をはじめ多くの画家に影響を与えました。しかし、スーラは1891年に31歳の若さで急逝します。失意のシニャックは大きなヨット「オランピア」(マネの作品名に由来します)を造り、翌年、大海へと漕ぎ出します。3月にブルターニュを出発し、ボルドーからガロンヌ川に入り、ミディ運河を経て地中海のセートに抜け、5月に南仏サン＝トロペに到着しました。シニャックはこの地を気に入って制作の拠点とし、多くの友人の画家を招きました。マティスは1904年にサン＝トロペのシニャック邸に家族で滞在して新印象主義の色彩を学び、それをきっかけにフォーヴの絵画を生み出します。

シニャックは社会的で面倒見のよい性格だったようです。20代の頃にはゴッホとともにアニエールで戸外制作を行いました。後にゴッホがアルルの病院に入院すると、そこを訪ねて励ましています。シニャックと交流が続けた画家の一人がボナールです。4歳年下のボナールは度々、サン＝トロペを訪

ね、シニャックの船に乗せてもらっています。当館が所蔵するボナール《海辺の人》(図2)は南フランスのイル＝ドールという海に浮かぶ小島が描かれています。そこは赤茶色の大地が露出する風光明媚な小島で、サン＝トロペから20～30km、船でしか行くことができない場所にありま。ボナールは1914年の1、2月にサン＝トロペに別荘を借りて制作を行っており、シニャックと度々会っていました。イル＝ドールへの小旅行は、シニャックの船によるものかもしれませんが、ボナールは後にシニャックが船を操る様子を油彩画《船上のシニャックと友人たち》(1924年頃、チューリッヒ美術館蔵、図3)に描いています。中央で舵を操るのがシニャック、その左には妻が座り、画面右にはコレクターのヨス・エッセルがいます。帆に風を受けて海に漕ぎ出すシニャックは、若い画家たちを新しい表現へと導く水先案内人のようです。そしてシニャックと仲間たちが乗る船は、文字通り近代絵画の航図を大きく広げていきました。



図1 ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》1882年 上原美術館蔵 38.6×56.0cm



図2 ピエール・ボナール《海辺の人》1914年 上原美術館蔵 30.8×43.0cm



図3 ピエール・ボナール《船上のシニャックと友人たち》1924年頃 チューリッヒ美術館蔵 125.0×137.0cm

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会「きん ぎん すみいろ」「船と絵画」のギャラリートークを担当学芸員が行いました。

会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。
※新型コロナウイルス感染症流行状況により、開催を中止にする場合がございます。公式SNS等でご確認ください。

教育普及

島田市立六合中学校オンライン授業 5月19日
静岡県立伊東高校城ヶ崎分校出張授業 6月16日、23日

奈良や京都へ修学旅行に行く中学生を対象に、田島主任学芸員がオンライン授業を行いました。仏像の見分け方や修学旅行先で訪ねる予定の寺院のおすすめポイントをお話ししました。併せて職業紹介ということで学芸員の仕事を紹介しました。伊東高校城ヶ崎分校は昨年度に引き続き今年度も1年生を対象に、土屋学芸員が日本画の画材や技法についてお話し、その後、色紙を用いて実際に作品制作を行いました。

講演

「わたしの好きな仏像」 於：栄中日文化センター 4月3日
「異国の仏、日本のみほとけになる」 於：SBS学苑パルシェ校 5月25日
「絵画を楽しむ」 於：河津バガテル公園 6月11日
下田市寿大学講座 於：下田市民文化会館 6月15日

田島主任学芸員が名古屋・栄中日文化センターで、西山厚先生(帝塚山大学客員教授)、久保沙里菜さん(フリーアナウンサー)と登壇し、「わたしの好きな仏像」をテーマに講演と鼎談を行いました。また、SBS学苑の連続講座『日本人の美意識』中の一講座でインドから伝わった仏像が日本で受容された様子をお話ししました。さらに、下田市教育委員会からの依頼で下田市寿大学の仏教美術に関する講座を行いました。土森主任学芸員は河津バガテル公園主催で、当館展示中の絵を紹介しながら絵画鑑賞を楽しんでいただく入門講座を行いました。

番組

伊豆を紹介する旅行番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「画家を魅了した下田の風景」(リポーター八木美佐子さん)の回で、当館が紹介されました(6月16日：テレビ埼玉/6月17日：テレビ神奈川・千葉テレビ)。6月23日より番組YouTubeでもご覧いただけます。現在開催中の展覧会「船と絵画」から牛島憲之《雨明かる》が紹介されています。また、同YouTubeでは昨年度の企画展を紹介した「どこか懐かしい里山の風景に癒されて 後編」もご覧いただけます。

国際博物館の日 5月18日

ICOM(国際博物館会議)では5月18日を国際博物館の日として、多くの方に広く博物館の活動を知っていただき、親しんでもらうイベントを協賛館で行っています。当館もこの活動に賛同し、当日は無料入館として、多くのお客様に美術館をお楽しみいただきました。



ギャラリートーク「きん ぎん すみいろ」



ギャラリートーク「船と絵画」



教育普及(六合中学校オンライン授業)



講演「わたしの好きな仏像」



講演「絵画を楽しむ」



番組『いい伊豆みつけた』の撮影風景

書籍

大塚幹也編著『静岡県で愉しむ仏像めぐり』 静岡新聞社 2022年 1800円(税別)

静岡県内と愛知県・東三河の仏像をイラストや写真で分かりやすく紹介した書籍『静岡県で愉しむ仏像めぐり』(大塚幹也編著)が2022年1月に出版されました。地域ごとに仏像を拝観するコースが設定され、仏像めぐりをする際に役立つガイドブックになっています。この中の伊豆南エリアと^{がくなん すんとう}岳南・駿東エリアの一部、2つのコラムを田島主任学芸員が執筆しました。また、河津町・^{なぜんじ}南禅寺の平安時代に造られた仏像群に関するコラムを収録しています。

『金沢文庫研究』348号 神奈川県立金沢文庫 2022年 500円(税込)

当館で2018年11月に調査を行った河津町沢田・林際寺のご本尊、地藏菩薩像に大きな発見がありました。この調査成果を田島主任学芸員が上原美術館通信No.6でご紹介し、多くの反響をいただきました。この度、神奈川県立金沢文庫発行の『金沢文庫研究』にて田島主任学芸員がこの地藏菩薩像についての詳細な論考を発表しました。

『目の眼』No.551 2022年8月号 株式会社目の眼 1200円(税別)

古美術や骨董を紹介する雑誌『目の眼』No.551で土森主任学芸員の連載コラム「コレクターのまなざし」が最終回を迎えます。No.499号(2018年4月)において、上原コレクションの始まりでもあるアンドレ・ドラン《裸婦》から連載を開始し、4年半にわたって隔月で当館コレクションをご紹介してきました(全27回)。最終回はパブロ・ピカソ《科学と慈愛》です。

ラジオ番組放送中

●SBSラジオ「なむなむ仏像講座」出演

静岡県東部～伊豆の情報を発信する、SBSラジオの番組『Radio East(ラジオイースト)』内の小コーナー、「なむなむ仏像講座」に田島主任学芸員が出演しています。お相手のフリーアナウンサー久保沙里菜さんは、7歳の時、京都・三十三間堂の仏像群に出会い、心奪われて以来という筋金入りの仏像好き。10分間のミニコーナーですが、知っているとちょっと面白い仏像の見方をお話しています。放送は以下の周波数ですが、インターネット上の特設HPでは、過去の放送をいつでもお聴きいただけます。

放送日時：毎月第4土曜日 11時15分頃～11時25分頃
FM：93.9MHz(静岡)、94.7MHz(浜松)、90.1MHz(三島・下田)、92.1MHz(御殿場)
AM：1404kHz
特設HP：<https://www.at-s.com/sbsradio/namunamu/>

●FMみしまかんなみVOICE CUE「アートインフォメーション」出演

FMみしまかんなみの『ももいろクラブ』内「アートインフォメーション」コーナーでパーソナリティーの八木英子さんと当館学芸員が、開催中の展覧会の見どころをご紹介します。番組放送中はFMみしまかんなみのホームページからも聴くことができます。

放送日時：毎月第4月曜日 13時15分頃～13時25分頃
FM：みしまかんなみVOICE CUE (FM77.7MHz)



『静岡県で愉しむ仏像めぐり』



『金沢文庫研究』348号

※左記の書籍は金沢文庫研究以外、一般書店でお求めいただけます。



SBSラジオ「Radio East」内コーナー「なむなむ仏像講座」



「なむなむ仏像講座」の特設ウェブサイト

伊豆だより



美術館も館庭の木々や周辺の山の濃い緑に囲まれるようになりました。館庭はあじさいや花菖蒲などが咲いて、華やかな雰囲気になりました。6月は下田市の下田公園で約15万株100種以上のあじさいの花が咲くあじさい祭が開催され、多くのお客様が訪れていました。色とりどりの花が山の斜面に咲く景色は圧巻です。

当館から車で15分ほどの場所にある、河津町のバラ園・河津バガテル公園も6月中旬には春バラの見頃を迎え、6000株ある様々なバラが咲いていました。こちらはパリのバガテル公園を模して造られたバラ園で、園内にある池にはモネゆかりの睡蓮が株分けされています。モネが描いた睡蓮の絵を思い浮かべながら見るのも楽しいかもしれません。
(櫻井)

おすすめの展覧会



特別展「生誕100年 ドナルド・キーン展—日本文化へのひとすじの道」

2022年5月28日(土)～7月24日(日) 県立神奈川近代文学館

日本文学研究者のドナルド・キーン(1922-2019)さんが生誕100年を迎えました。キーンさんは1940(昭和15)年、アーサー・ウエーリ翻訳による『源氏物語』に出会い、日本文学の世界へと導かれました。その後、アメリカ海軍の語学将校として太平洋戦争に従軍し、日本兵の日記などを通じて日本文化への興味をさらに深めます。戦後は深い洞察にもとづく日本文学や日記の研究を行うほか、三島由紀夫や谷崎潤一郎、川端康成らとの交流を通じて日本の近代文学を海外に紹介しました。また、コロンビア大学などで教鞭を取り、多くの日本文化の研究者を育てました。2012年には日本に帰化し、最晩年に至るまで飽くなき探求心で日本文学の研究を続けます。本展は、その偉大な功績を資料や写真、愛蔵品などから丹念に辿る展覧会です。

キーンさんは、伊豆・下田にも深い縁がありました。夏を過ごす三島由紀夫に会うため、幾度も下田を訪れています。1986(昭和61)年、キーンさんが東京の個展会場でたまたま出会ったのが下田在住の陶芸家・土屋典康さんでした。以来、毎年夏とお正月には土屋さんのお宅を訪ねて、交友を深められました。土屋さんの窯が近くにあるご縁から、上原美術館にもよく立ち寄っていただきました。キーンさんの多方面にわたる芸術への造詣の深さは驚くばかりですが、そうでありながら一つひとつの作品と真摯に向き合い、誰とでも分け隔てなくユーモアを交えながらお話しされるお姿はとても印象的でした。

今回の展覧会ではキーンさんが愛蔵した土屋典康さんの器も書齋コーナーの一角に展示されています。キーンさんの日本文化への愛と、優しいお人柄があらわれた素晴らしい展覧会です。
(土森)